# 支え合い生きた記録

## 絆むすんで

## 広島戦災児育成日誌から

広島戦災児育成所の全景。小高い丘に、子どもたちが暮らした寄宿舎も見える

### 支援

## 真白いおにぎりを頂く

周囲の支えなしに、育成所は成り立たなかった。開設から間もなく、支援についての最初の記述がある。

**「土地の青年有志来訪。協力を約して帰る」**（46年1月4日）

正月早々である。その二日後には、次の来訪者もあった。

**「地元青年団員七名勤労奉仕。倉庫の屋根修理。倉庫が気持ちよく整理さる」**（46年1月6日）

広島から遠く離れた農村部の青年たちは、食料を携えて育成所を訪ねた。

**「青年団数名トラックにて慰問のため来所。子供らに真白いおにぎりを頂く」**（46年4月7日）

この月に育成所を訪れた青年団は、双三郡田幸村（三次市）、山県郡吉坂村（広島県北広島町）など七団体に上る。戦後間もなく盛り上がった青年団運動の熱意は、育成所にも届いた。

孤児の支援を目的にした催しが相次ぐ。「戦災孤児資金援助」と銘打った大相撲が近くの楽々園（広島市佐伯区）であった。

**「朝から服よ靴よ辨当よ水筒よと世話する母、嬉々として出発を待つ子等の風景は実に楽しいものであった」**（46年4月26日）

漫才師横山エンタツが登場する演芸会や、歌舞伎役者市川猿之助による慈善演芸会など、大スターが次々と広島を訪れた。

野球の一投一打に歓声がわいた（1949年11月）

連合国軍総司令部（GHQ）関係者とみられる人たちが育成所の子どもたちを励ました（1948年12月）

## ゆかりの鬼瓦 今も

### 跡地の障害者施設が保管

育成所の跡地に立つ障害者施設「広島市皆賀園」のガラス棚に、育成所ゆかりの鬼瓦が保管してある。「育成所にお寺があり、そこの屋根に使われていたようです」。加藤美代所長（57）によると、地元住民から一九九二年、寄贈を受けたという。

その名も「童心寺」。育成所内の丘の中腹にあった。毎朝、起床の合図として半鐘が響き、子どもたちの読経が続いた。浄土真宗僧侶だった育成所の創設者山下義信氏（故人）は、親を恋しがる子どもたちに「仏様に祈れば、お父さん、お母さんに会える」と説いた。

「父は戦後も庭木の手入れで、よく育成所に出入りしていました。『義信さんは立派な人じゃ、偉い人じゃ』と繰り返していました」と長男詳三さん（60）＝広島市佐伯区。身寄りを失った子どもたちの集団生活を、住民は温かく支えた。

童心寺があった皆賀の丘には、子どもと職員が寝食を共にした寄宿舎や、一緒に汗を流した農場もあった。子どもたちは毎日のように、丘を上り下りした。

育成所は歴史を閉じ、寺は取り壊された。丘の大半も削られて住宅団地となり、当時の面影はない。ただ、懐かしんで訪ねる人を、久保田さん父子が建てた「童心寺跡」の標柱が迎えてくれる。

鬼瓦を施設に寄贈したのは近くの久保田秀夫さん。三年前に九十二歳で亡くなった。育成所の場所に戦前あった県農業試験場の職員だった。

「育成所の歴史を伝える大切な品。いつまでも大切にしたい」。童心寺の鬼瓦を前に語る加藤所長

育成所の跡地には今、広島市皆賀園が立つ。宅地開発により一帯の景色はすっかり変わった

### 〈育成所と原爆孤児支援の歩み〉

| | | |
|---|---|---|
| 1945 | 8・6 | 広島に原爆投下 |
| | 8・10 | 広島市が比治山国民学校に戦災孤児収容保育所を設置 |
| | 12・23 | 浄土真宗僧侶の山下義信氏が広島県五日市町皆賀（現広島市佐伯区）に広島戦災児育成所を開設 |
| 46 | 2・10 | 比治山戦災孤児収容保育所を閉鎖、育成所に統合 |
| | 8・6 | 育成所の子どもたちが、中島本町（現中区の平和記念公園）の戦災供養塔を訪ねる |
| | 11・15 | 育成所の男児５人が、京都の西本願寺（浄土真宗）で得度 |
| | 12・24 | 米国の民間支援団体から「ララ物資」が育成所に届く |
| 47 | 4・20 | 山下所長が参院選で初当選。２期務め、原爆医療法制定（57年）に尽力 |
| | 6・8 | 育成所の話題を取り上げた「童心タイムス」を子どもたちが創刊 |
| | 8・6 | 中島地区で広島市主催の第１回平和祭に育成所の子どもたちが参列 |
| | 12・7 | 昭和天皇の行幸を五日市町内の道路で出迎え |
| 49 | 8・11 | 米国人ジャーナリストで平和活動家のノーマン・カズンズ氏が育成所を視察。米国などの有志が原爆孤児を金銭的、精神的に支援する「精神養子」を提起する契機となる |
| 50 | 2・22 | 育成所の11歳児童とミズーリ州教師の間で初の精神養子縁組 |
| 53 | 1・1 | 育成所の運営を広島市に移す |
| 60 | 4・1 | 市童心園へと改称 |
| 67 | 3・15 | 市童心園を閉鎖。育成所以来、約21年間で312人が巣立った |

### 衛生

## 全員に頭虱あり、毛布全部硫黄にてイブス

**「比治山の生徒殆ど疥癬あり」**（45年12月27日）

**「本日入所の三良坂生、全員に頭虱あり、毛布全部硫黄にてイブス」**（45年12月28日）

育成日誌第一巻の記述に、終戦直後の衛生状況がのぞく。

育成所は四六年二月に「虱撲滅週間」、三月に「眼病撲滅週間」を展開した。衣類や寝具に殺虫剤DDTを散布し、洗眼の指導を繰り返した。シラミはほぼ駆除できたものの、眼病は手ごわかったとみられる。

**「眼病撲滅週間終リニ近キニ奮発、闘病ノ要アリ」**（46年3月26日）

急性結膜炎やトラコーマなどの病名がしばらく目立っている。

腹痛や夜尿も日常茶飯事だった。職員たちは子どもの健康に気を配った。

**「昨日よりにんにく一個づつ、血色よからぬ者に食べさす」**（46年1月23日）

**「（個人名）腹痛。スイバを食べたのではないか」**（46年3月5日）

スイバは道端に生えていたという。

育成所であった月見会。家族的な雰囲気で四季の催しを楽しんだ（1953年9月）

衛生状況がひとまず落ち着くのは、被爆から一年を経た四六年夏ごろ。厳しい夏を乗り越えた心情を職員はこう書いた。

**「地方ではコレラだ赤痢だとさわいでゐるが当所には一人の病人もなく、憂慮されたこの夏の猛暑も難なく克服出来得たことは栄養部、医務部および母親の日頃の注意の賜と慶賀に堪えない」**（46年9月15日）

日誌の引用部分は原文のまま。一部に振り仮名をつけるなどした。